

新水稻奨励品種「にこまる」の特性

高品質・良食味と多収性を併せ持つ晩生品種

研究開発の背景

◇和歌山県の晩生の主力品種である「ヒノヒカリ」で、夏季の高温による白未熟粒の発生が多発しており、検査等級を下げる主な原因となっている。

◇そこで、夏季の高温による白未熟粒の発生が少ない、外観品質の優れる品種として、「にこまる」を選定し、2017年2月に和歌山県水稻奨励品種に採用された。

研究成果の内容

「ヒノヒカリ」熟期で収量・品質・食味が優れる有望品種

- 出穂と成熟** 同熟期の「ヒノヒカリ」と比べて出穂期で3日遅く、成熟期で5日程度遅い。
- 外観品質** 白未熟粒の発生が少なく、玄米外観品質が2.4と高い。
- 収量性** 「ヒノヒカリ」と比べて収量はやや高く、54kg/a程度である。
- 耐倒伏性** 「ヒノヒカリ」と比べて稈長は長いが、耐倒伏性は同程度である。

品種名	両親の組み合わせ	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	耐倒伏性	玄米収量 (kg/a)	玄米千粒重 (g)	品質	白未熟粒					整粒率 (%)	採用年次
											心白	乳白	基部未熟	背白	腹白		
にこまる	きぬむすめ×北陸174号	8.28	10.09	88.7	17.5	306	やや強	53.9	23.6	2.4	0.7	0.1	0.1	0.0	0.1	69.3	平成29年
ヒノヒカリ	黄金晴×コシヒカリ	8.25	10.04	81.6	17.9	344	やや強	52.2	22.3	5.6	1.9	1.0	0.5	0.2	0.0	70.2	平成5年

注) データは農業試験場の奨励品種決定調査(2011~2016年)の平均値。移植期は6月16日。

耐倒伏性:0(無)~5(甚)の6段階で評価

品質:1(上・上)~9(下・下)の9段階で評価

心白、乳白、基部未熟、背白、腹白の発生程度は、0(無)~5(甚)の6段階

整粒率(%)は精玄米を品質判定器ES1000(静岡製機)で測定したもの

産地の状況

○普及予定地域・面積

現状の「ヒノヒカリ」(栽培面積:約500ha)に替わる品種として県北中部で普及推進。



期待される効果

☆1等米比率の向上

和歌山県産米の評価アップ
販売単価の向上